

図書

8
2017



岩波書店

二〇一七年八月一日発行(毎月一日発行)第八三三号

図書

二〇一七年八月一日発行(毎月一日発行)第八三三号 二〇一七年八月

定価(本体九三円十税)
8—2017

編集・発行者 坂本政謙 発行所 株式会社 岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
©岩波書店 2017 本誌掲載の記事は無断転載をお断りします

Curious George[®] おさるの ジョージ展



「ひとまねごぞる」からアニメーションまで



©&ℓ Universal Studios and/or HMH
(南シシッピ大学所蔵)

8月9日水 - 21日月 松屋銀座8階イベントスクエア

午前10時 - 午後8時(最終日5時閉場。入場は閉場の30分前まで)

主催=NHK、NHKプロモーション 協力=NBCユニバーサル・エンターテイメントジャパン

入場料:一般1,000円、高校生700円、中学生500円、小学生300円
一般前売券700円、高校生前売券500円、中学生前売券400円、小学生前売券は当日券と同額
(ヤフーバスマーケット、チケットぴあ、ローソンチケット、セブンイレブンにて8月8日まで販売。

Pコード768-392/Lコード31617/セブンコード055-467)

おさるのジョージ公式HP <http://www.nhk-character.com/chara/curiousgeorge/>

松屋銀座 / 営業時間 午前10時 - 午後8時 〒104-8130 東京都中央区銀座3-6-1 電話03(3567)1211 大代表 www.matsuya.com

MATSUYA GINZA

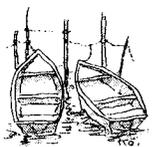
編集部 (03)5210-4213 「図書」購読係 (049)285-1739 読者係 (03)5210-4111 振替 00110-5-74416 (「図書」専用)
<http://www.iwanami.co.jp/tosho/> 印刷所 大日本印刷株式会社 東京都新宿区市谷加賀町1-1-1

雑誌 06615-08



4910066150877
00093

戦争体験を語れる最後の世代を生き延びて



柳澤 桂子

私は生命科学者でしたが、三八歳のとき、診断のつかない病気にかかり、生命科学の研究をあきらめざるを得ませんでした。

それからおよそ四〇年に及ぶ闘病生活を送ることになりましたが、それでもいのちの不思議は頭を離れず、私が在ることの不思議を考え続けました。そして、それをたくさんのエッセーにしてみました。

ですが、戦争のことをまとめて書くのはこれが初めてです。

*

のは、有名な道後温泉の近くにある学校の教員用宿舎でした。

ゆっくり休んでから外に出てみると、そこは東京のゴチャゴチャした様子の微塵もない青空の高いところでした。

足元を見るとハコベ、オオイヌノフグリ、ナズナなど、私の大好きな春の小さな花がたくさん咲いていました。

少し歩くと行けども行けども紅色のレンゲ草の野原です。私はその上をゴロゴロ転がってレンゲ草の甘い香りにむせびました。

また別の方向へ歩くと、水の澄んだ小川がありました。あまりにも澄んでいるので、川底の小石が手に取るようになっていきりと見えました。川の水溜まりにはオタマジャクシが尾を振っていました。

ですが残念なことに、辺りの野原には生まれたばかりの赤ちゃん犬や赤ちゃん猫たちが、たくさん捨てられています。

犬も猫も、生後一、二日だったと思

昭和一五年（一九四〇年）を越すと、それまで比較的穏やかだった東京にも、急速に危険がせまってきました。

両親は、東京を離れる決心をしました。た。ちょうど愛媛県松山市の旧制高等学校に父の職があったからです。松山は父の郷里である大分市に近いことも、両親を乗り気にさせました。

私が四歳、弟が二歳の時に一家四人は住み慣れた東京を離れて、松山へ向かいました。東京から、子供には堪え難い長い時間を汽車に揺られ、岡山県の南端にある宇野につきました。

ここから別府へ向かう航路を中型の船

ますが、弱っていて水を飲むこともできません。

私はこのような犬猫をみんな家に連れて帰りました。母の許しを得て、死にかけている赤ちゃんたちを廊下に並べたので、我が家は野戦病院のようになりました。

犬や猫は一匹ずつ布で包んで、私が抱き上げて、脱脂綿に水を含ませて割り箸で歯茎を濡らしてやりましたが、どの子も水を飲み込む力がありませんでした。

掌の中に抱きしめて温めてやりました。が、赤ちゃんはだんだん冷たくなっていききました。だんだん硬くなっていききました。父に頼んでも、母に頼んでも、どうしようもない現実と初めて向き合いました。

私の掌の中で硬く冷たくなった赤ちゃんの感触だけが、しっかりと私の心に残りました。

やっと生まれてきた赤ちゃん。死んでも誰も泣いてくれないのでは、あまりに

に乗って、愛媛県の今治まで行きます。今治に着いたのは夜中の一二時頃ですが、私と弟も起こされて、リュックを背負ってちどりで船を降りました。

棧橋は眠気が吹き飛んでいくほど心地よい場所でした。海にきらきらと揺れる光、はじめて嗅ぐ潮風の匂い。棧橋から陸に上るとたくさんの旅館が灯を明々とつけて、若い衆が客引きをしていました。

父が選んだ客引きに案内されて、私達は旅館の一室に荷を下ろしました。

ここからまた汽車に乗って松山に着きました。私たちの住むことになっていた

も可哀そうです。一匹死ねたばに私はその子を掌に包んで、簞笥の陰でたくさんの涙を流しました。思い切り泣いてやりました。

呼吸が止まったことを確認してから、私は布で包んだままの亡骸をお庭の土の中に埋め、上から石を一つ乗せて、お水を供えました。私の手に残してくれたあの冷たさ、硬さを忘れることはできません。あれが死の感触なのです。

こちらの世界に戻れなくなる一線を越えて行ってしまった小さな命たち。私は助けてやれなかったのです。

そうしているうちにも戦争は激しくなっていました。

お天気の良いある日、私は同級生の道子ちゃんと草原を歩いていました。二人とも白い服を着ていました。

飛行機の音がするので振り向くと、グラマンの戦闘機がすぐ近くまで来ていました。

私はとっさに「伏せて！」と叫んで、道子ちゃんと草叢に倒れ込みました。私たちが子供だと気づいたのでしょ。グラマンは方向を変えて飛び去りました。

太平洋戦争中、日本でも米軍によるグラマンなどの小型戦闘機による機銃掃射が行われました。軍事施設や列車、船舶などだけでなく、開けたところを歩く人間にも低空飛行で接近して銃撃するのです。撃たれた方の中には、内臓破裂で即死した方もありました。

小学校一年生だった私は、アメリカの戦闘機が追いかけてきて銃撃するという話を聞いたことはありましたが、まさか自分がそういう目に会うということの怖さを知りませんでした。

ですからその時は恐ろしさもあまり感じなかったのですが、時が経つにつれて、そのことを思い出すとからだが震えます。

があつたのです。空襲警報のサイレンが鳴り止みませんでした。ウー、ウー、とサイレンが二回鳴るのが「敵機が来た」という知らせです。サイレンの音と同時にB29の飛行音が聞こえはじめました。農家の二階から見るB29は、大きかったです。

たくさんの飛行機が西の空を埋め尽くすように現れて焼夷弾を落としはじめました。深夜にもかかわらず、私は一部始終を観続けました。

まっ暗な空に、火の玉のように燃える焼夷弾がすばいに見えました。焼夷弾は二重構造になっていて、内側

学校へは集団登下校となりました。家の近い児童がグループを作り、年長の子がリーダーになりました。

登下校中に警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴ると、その場に身を伏せるなどの適切な方法を上級生が責任をもって指示しなければなりません。

万一、いのちに危険が及ぶような場合には、上級生から先に犠牲になるようにと、朝礼のときに校長先生からお話がありました。

学校で空襲になった時は、防空ずきんを被って机の下に入ります。

夜はお向かいの堀さんのおばさまと二人の子供さんと母と私たち姉弟が、毎晩行動を共にしました。

父や堀のおじさまはじめ、男の人達は二四時間体制で働いていて、妻子と行動を共にすることはできませんでした。

私たちは毛布と少しの食べ物をもって、松山市の北部を流れる石手川の川原の葦叢の中に毛布を敷いて寝ました。

にある部分が短い六角形になっていることまでよく見えました。その六角形の部分が、一段と明るく輝いていました。真つ赤な筒は雨のように松山の街の上に降りそそぎました。やがて焼夷弾は爆発して、大きな音を轟かせはじめました。

あの下に居る人たちはどんなに怖い思いをしているのか、たくさんの人が今、この瞬間に焼け死んでいるのだと思いつつ、私はからだを凍りつけていました。

数日後、松山へ帰ってみると、あの大きな六角形の筒は、黒こげになって、あ

アメリカが、日本に上陸するという危機は早くから噂されてきました。昭和二〇年三月から六月末にかけて、アメリカが沖繩本島に上陸してアメリカ人も含めて二二十万人以上が亡くなりました。

これがアメリカ軍の日本上陸のはじまりでした。日本本土もいつ空襲されるか、いつ地上戦になるかわかりませんでした。

堀さんのおじさまが外科医だったので、青酸カリを入手することができました。

「もし敵兵が攻めてきたら、子供たちに先に毒物を服ませ、そのあとでおばさまと私が服むことに決めてあつた」と、戦争がすんでから母に聞かされました。

いよいよ松山に大空襲が来るかもしれないと思われたある日、母と私たち姉弟の三人は、松山市から一二キロくらい離れた砥部という農村に疎開しました。七月二十六日のことでした。

そしてその晩、ほんとうに松山に空襲

ちこちに散らばっていました。街は焼け野原になって、人影もまばらでした。

私は、「この目で殺戮の現場を見た」ということをしっかりと胸にしまい込みました。

その日はついにやってきました。

昭和二〇年八月六日。空は真つ青に晴れて、夏の日差しが、朝からガラガラと照りつけていました。

私は国民学校二年生になっていました。早生まれの七歳です。その日もランドセルを背負って、元気に学校へ向かいました。

ふたつの憲法と日本人

川口暁弘著 戦前・戦後の憲法観
1度も、1文字も改正されなかったのはなぜか？ 日本人にとっての「改憲」を問う！ 2000円
(歴史文化ライブラリー49)

江戸の親子

父親が子どもを育てた時代
太田素子著 下級武士の日記から、親子関係と子育ての実態に迫る。
(読みなおす日本史) 2200円

牛車で行こう！

平安貴族と乗り物文化
京楽真帆子著 魅力之余すところなく語った注目の書。 1900円

沖縄の戦争遺跡

吉浜 忍著 今も残る数千件の戦争遺跡から厳選し平易に解説。沖縄戦の実態に迫る！ 2400円

古代の東国 全3巻

- 完結！ 各2800円
- ①前方後円墳と東国社会
【古墳時代】……若狭 徹著
 - ②坂東の成立
【飛鳥・奈良時代】……川尻秋生著
 - ③覚醒する(関東)
【平安時代】……荒井秀規著

天皇の美術史 全6巻刊行中

- 既刊4冊 各3500円
- ②治天のまなざし、王朝美の再構築
【鎌倉・南北朝時代】
伊藤大輔・加須屋 誠著
 - ③乱世の王権と美術戦路
【室町・戦国時代】
高岸 輝・黒田 智著
 - ④朝廷権威の復興と京都壇壝
【江戸時代後期】
五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明著
 - ⑤近代皇室イメージの創出
【明治・大正時代】
塩谷 純・増野恵子・恵美千鶴子著

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151/価格は税別

いつものように授業が終わるとき、先生が「広島で大変なことが起きたらしい」と悲しそうにおっしゃいました。それ以上はまだわからないとのことでした。

原爆投下の翌日も松山の空は晴れていました。そして瀬戸内海を越えて、松山でも広島島のキノコ雲が見えたのです。

母が言いました。「ご覧なさい。あの白い雲の柱を登って、御霊が天に逝かれるのです。お祈りしなさい」

私はキノコ雲の方を向いて手を合わせ、長い間祈っていました。「天国で幸せに」

いつ松山にも原爆が投下されるかわからないので、私たちはまた砥部に戻りました。

昭和二〇年八月二十五日の砥部は、やや雲が出て蒸し暑い日でした。

一二時から玉音放送があるということは、口づてに広まって、子供たちも知っ

ていました。

どこの家からか、七〇センチメートルくらいの高さの机が一つ持ち出され、畑と畑の間の空地に置かれました。

男衆が電気のコードを持ち歩いていましたが、すぐに繋がって、ラジオは鳴り始めました。テスト、オーケーです。

一二時までにはまだ三時間もありません。皆落ち着きませんでした。

天皇陛下は国民に何をおっしゃるのだろう。「戦争が激しくなってきたが、団結して、最後まで闘いぬくように」とおっしゃるのではないかと、私は思いました。

一二時が近づくとぼつりぼつりと人が集まりはじめました。三、四〇人の男女が集まりましたが、皆寡黙でした。子供は少ししかいませんでした。

一二時かつきりに玉音放送がはじまりました。ラジオの音がぐぐもっていて、天皇のお話はよく聴き取れませんでした。私には何もわかりませんでした。

達が、飛行機や船で敵機に体当たりをして自爆するのです。一四歳から多くの少年たちが志願し、一万人以上の尊い命を犠牲にしました。

当時、少年兵は私よりもずっと歳上のお兄さん達でしたので、大きくなればそんなことも平気でできるようになるのだろうと思っていました。

しかし自分がその年齢に近づくとつれて私は耐えきれなくなって、関連する本を読みあさり、少年兵の本心を表すものを見つけることができました。

出撃前夜の食事時に、一人の少年が「死ぬって痛いことかな」と言ったのです。きつと心の底から、怖かったのです。死の恐怖とは、自我が確立する二、四、五歳まで感じにくいのだそうです。

まだ死とは何かを知らないうちに「行って参ります」と言ってお出撃した子供たち。私はこの子達が親の前でも泣けなかつた苦しみを思う時、熱い塊が胸に込み上げてくるのです。

聴いていた女の人は、ほとんど泣いていましたので、私も取り敢えず泣いておきました。お日様が顔を覗かせたので、一層蒸し暑く、涙はすぐに乾いていきま

した。聴き終わった男衆もあまり声を出さず、お通夜のような湿った空気が立ちこめていました。天皇の御言葉について議論する人はいませんでした。

戦争が終わり、焼けなかった私の家には、昔のおばさんも戻ってきました。昔のおばさんはお手伝いさんとして母が雇っていたのですが、来る日も来る日も泣いていて仕事になりませんでした。

おばさんは六〇歳くらいだったでしょう。松山空襲の日に、ご主人を死なせてしまったのです。

昔のおばさんは中気(半身不随)で寝たきりでしたが、おじさんの寝ている長屋にも火が燃え移りました。おじさんの足元に火が着きました。

あの戦争から、七〇年以上が経ちました。私は実体験として太平洋戦争を語る、最後の世代です。

生命科学に心惹かれながら、長年病床で過ごすことになってしまいました。戦争で亡くなった方々と、私の掌の中で死んでいったたくさんの子犬や子猫たちが、私に大きなものを遺してくださいと感えています。

そのおかげで、私はしっかりと死生観を持つことができました。

私は戦争の悲惨さをこの目で見ました。いま、生命科学を学んできたからこそ、長い時間を病と共に過ごしてきたからこそ、一人ひとりが奇跡的ないのちであることを実感しています。

だから、若い人たちに伝えたいのです。

いのちを大切に。戦争ほどばからしいことはありません。

(やなぎさわけいこ・生命科学)

おじさんはおばさんに「早く逃げろ」と叫びました。一時の恐怖から、おばさんは家の外に出てしまいました。

正氣に戻っておじさんの所に戻ろうとしましたが、人の波に押されて戻れませんでした。おばさんは、おじさんを置き去りにしてしまつたのです。

母はおばさんの話を聞いて慰め、日当をもたせて帰りました。

私の従兄弟も二人、戦死しました。遠くに住んでいたのでよく知らなかったのですが、二人とも親思いの優しい子だったと聞いています。

親戚の晴美ちゃんのお父さんも、戦死しました。父の学校の体育科の相原先生も、防空壕の入り口で焼夷弾に当たって亡くなりました。

ここまでは私の身の回りで起こった出来事ですが、戦争にはもっと悲しい思いがあります。特攻隊のことです。

まだ声交わりをするかしないかの少年